

人間世界において存在し続ける妖怪たち

― 民間で作られた異界・不思議なものたちの立場 ―

ブ・フォン・アイン

はじめに

昔から、人間は物語を作るのがとても必要なことだと気づいていた。自分の想像力でいろいろな不思議な存在を誕生させたのは人間自身である。「妖怪」というものは昔の人が作ってきた物語で生まれてから現代まで存在し続けている。

『ぬらりひょんの孫』という漫画を読んだことがきっかけで、「妖怪」に対して興味を持ち始めた。なぜなら、その漫画のキャラクターたちはただの作家の想像から出た産物というだけではなく、日本の伝承において本当に存在しているものだとわかっていたからである。実は、ベトナムの民間伝承では「妖怪」という言葉を使っているが、一定したイメージがない。ベトナムの物語においては人と人との関係が中心で、「妖怪」のような非人間的なものはそのほとんどが主人公ではない悪役になる。しかし、日本の場合は異なる。

「妖怪」の種類が多いだけではなく、名前もきちんと付けたり、物語も詳しく語ったりされた。そのため、日本人や日本文化の理解に一步近づくために、「妖怪」について研究しようと思っていた。

本研究では、まず、「妖怪」とはどんなものなのかを明らかにする必要がある。さらに、「妖怪学」という言葉もあるので、日本文化の一つとして、研究テーマになるかもしれない。それで、先行研究を使って、「妖怪」は日本人の生活の中でどんな立場にあるのか、心理的な意味や哲学的意味などを検討する。また、地域や時代によって、「妖怪」の種類とか、イメージとか、物語なども異なるので、地理の面と歴史の面を分析して、日本の「妖怪」の世界を覗いてみる。次に、現在、「妖怪ブーム」がもう一度起こっていると言われているが伝承に現れた妖怪は今までどんなふうに変わってきたのか、どんなふうに関心になっているのかを分析する。最後に、「妖怪」は日本人の心と緊密に繋がっていることを証明したい。すなわち、日本の妖怪を中心とし、先行研究といくつかの作品を参考にしながら、日本人の生活と文化、または昔の日本人と現代の日本人の心理と考え方を理解することを目標としている。

1. 定義

どの国にも、伝承の中に一般的な知識を超えている非人間的な存在がある。例えば、人類の誕生や自然現象などを解釈するために、昔の人は神話を作った。神々は人間に尊ばれるために誕生させた存在であるが、妖怪というものはどのような目的で作られたのだろう。

1. 一般的な定義と研究者の定義

「ゲゲゲの鬼太郎」の作者である水木しげるによれば、妖怪は怪しい生き物・怪現象を全部ひっくるめたものだと定義されている。一般的に、人間には捉えづらい不思議な現象を発生させたり、人間に危害や予兆を与える非日常あるいは超自然の存在は妖怪と呼ばれるものである。日本文化においては妖怪も神の一種であるが、神ではない「神」、祀られていない「神」、神仏から否定された退治される「神」とも言える。「神」と「妖怪」はともに人間の理解を超える不思議な存在であるが、この二つの存在はどういうふうに人間の意識に植え付けられるのだろう。神は偉大なもので、尊敬したり、拝礼したり、感謝したりすべきで、一方、妖怪は恐ろしく邪悪で避けるべき対象だという考え方は決して可笑しくはない。つまり、昔の人は恐れを解釈したり感じたりするために、妖怪を創造したのだろう。

2. 宗教・信仰の視点から考えられる定義

世界中どこでも宗教を持っている人がいる。一般的に、宗教で不思議な力を持つ非日常的な存在がよく見られる。不思議な力を持つのは人間ができないこともできるという意味で、非日常的な存在というのは、人間の知識で考えれば、普通ではないものと言える。

「宗教」と間違えやすい概念を挙げよう。信仰とはなんだろうか。簡単に言うと、信仰は「何か曖昧なことをしっかり信じて、生きていくこと」と定義されている。なぜ「曖昧なこと」と書いてあるかという、そのことは科学的な証拠がないからである。ベトナムの場合を見てみると、「あなたの宗教は何ですか」と聞かれたら、多くのベトナム人は「宗教がない」と答えて、履歴書にもそう書く。一方、質問が「信仰がありますか」である場合は、「あります」という答えが多い。たとえば、死んだ家族は生きている人について守ってあげることとか、悪いことをしたら、生まれ変わりのときに最低の動物になることなどが挙げられる。確かにこれらのことも仏教から発するものだが、宗教ほどではない。妖怪の存在も信仰の一種である。人は恐怖しながら、妖怪の物語を口承したり、記載したり、妖怪の絵を描いたりし続けた。妖怪が本当に存在している確実な証拠がなくても、人の心の中では確実なもののように思われる。存在しているが、見えないだけ。目ではっきり見えるものと心で信じるものはどちらのほうの説得力を持つのだろう。

結論：「妖怪」には宗教と信仰の特徴の一部が見える。「神」と近く、人間の信心から誕生した超自然的な存在である。

II. 妖怪と人間の心の繋がり

定義を見たら、妖怪は人間の理解を超える奇怪な存在だと言われても、それらを通じて、人の心を理解できるようになれると考えられる。異常な性質を持つてはいるが、妖怪たちは人間が思っているより近くにいないかもしれない。特に日本の場合は妖怪の種類がとて多く、さまざまな状況で登場する。研究者も妖怪が日本文化の一部だと肯定している。

1. 闇と恐怖

妖怪について話すと、確かに「闇」も連想しやすい。少し考えてみたら、日本だけではなく、どこでも恐ろしい存在は「暗闇」と繋がっているものである。どうして人間は「闇」を怖がるのだろうか。どうして闇の世界に妖怪が存在していると思えるのだろうか。心理的な場面から見てみよう。

「暗所恐怖症」という精神疾患がある。William E. Lyons は「Emotion」という本の中で暗所恐怖症について書いている。知識が足りないときとか状況に対して無知な場合などに、恐怖が現れるという。暗所恐怖症とはただ明かりがない状態を恐れることだけではないかもしれない。もっと正確に言うと、人間の闇に対する恐怖の根元は知らないうちに、暗闇の中に悪いことや危険が起こるかもしれないと考えていることである。闇の中では視覚が使えない。目で見えないとき、確かに不安になるだろう。ほとんどの普通の人間は周りの世界を自分の目で観察したり判断したりしながら、生活をする。だから、目が使えない闇では、理性の正確度も低くなって、真実と想像力で作られた幻想の境界線もわかりにくくなっていく。そのため、妖怪は闇の住民だと呼ばれる。目で確認できないが、何か聞こえたり感じさせたりすると、それはどんなものなのかと知りたくて仕方がなくなる。妖怪は人間の理解を超える存在だと定義されているが、人間が異常な現象を理解しようとしたからこそ、作られたものだとも言える。妖怪は不安感を起こすものというより、人間に自分の心の不安を理解したり乗り越えたりさせるために存在していると思えることは合理的であると思われる。

しかし、人間は本当に矛盾した生物である。闇を畏れながら、闇の誘惑に耐えることができない。昔からたくさん作られ、今まで伝えられてきた怪談に限らず、現代はホラー映画、ミステリー漫画、小説などがとても盛んになっている。日本人をはじめとして、人間はどうして自分を怖がらせることを好むのだろうか。日本人にとって、「肝試し」はかなり人気がある活動、いわゆる、伝統的なゲームである。人を怖い場所に行かせて、恐怖に耐える力を試すことである。もっぱら夏の夜に行われて、肝試しを始める前に、その場所にちなんだ怪談話をする場合もある。参加者は1人もしくは2~4人程度のグループを作り、順番に決められたコースを巡る。脅かし役は白い布を被ったり、人形などを使ってお化けや妖怪、骸骨などに変装し、やってきた参加者を驚かせる。世界中である場所に幽霊がある噂は別に珍しい話ではなく、ときどき観光先になるところもあるが、日本人にとって、「肝試し」は特に気に入るゲームらしい。日本人は恐れ、または、緊張感を楽しめるのだろうか。「妖怪」のことも同じである。どんな国にも怪談や怖い話があるが、日本には特に多く、日本人はどこでもいつでも妖怪の物語を想像できるように見える。おそらく実は、日本人も恐怖という感情を感じながら、自分の勇気を試すためにたくさん怖いものを想像しているのかもしれない。

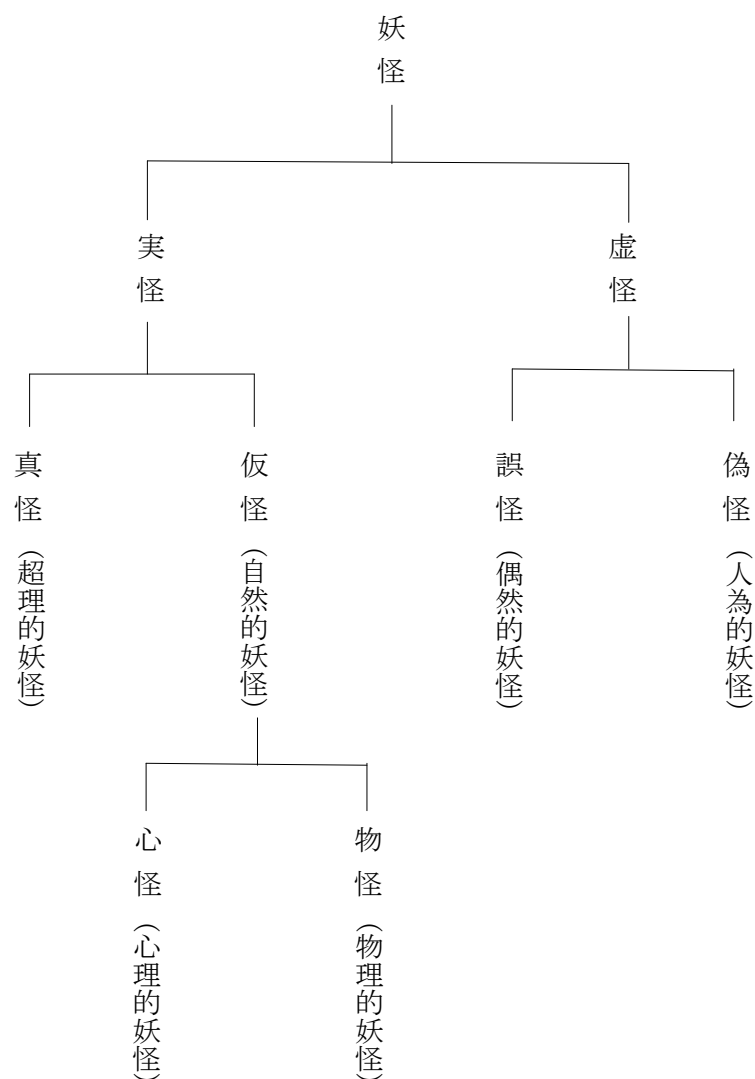
「妖怪」の誕生については、二つの推論がある。一つは、解説できない異常な現象に遭った人は自分の不安を乗り越えるために、なにか不思議なものを“犯人”とした。もう一つは、闇の中に何か恐ろしいがおもしろいものがあると信じ、頭を自由にさせ、好きに想像した。

2. 妖怪の分類

日本には夥しい数の妖怪が存在しているので、作られた理由もさまざまである。具体的な例を挙げ、その妖怪は人間の生活の中でどんな立場にあるのかを検討してみよう。

2. 1 井上円了による分類方法

井上円了は仏教哲学者、教育家である。迷信を打破する立場から妖怪を研究し『妖怪学講義』などを著し、「お化け博士」、「妖怪博士」などと呼ばれた。円了はつぎのように妖怪の分類をしている。



この分類を簡単に説明しておこう。

「偽怪」とは、人の意志、工夫によって作為的に作られた妖怪であり、「誤怪」とは、偶然に起こった出来事が、誤って妖怪と認められたものである。この二つの種類は人の虚構と誤謬から生まれるものであるもので、真の妖怪とは言えない。

「仮怪」は人為でもなく、偶然でもなく、自然に起こるものであり、物のうえに現象するものと、心のうえに現象するものを区別することができる。また、「実怪」には「仮怪」の他に「真怪」があり、真正の妖怪で、実在するものだと言われる。「仮怪」はそれを考究してその原理がわかれば、普通一般の規則と同一の道理に基づくものということができる。一方、「真怪」は「いかに人知進歩すとも到底するべからざるものにして、これ超理的妖怪なり」、どうしても解明することのできない、不可思議なものである。

以上の説明をみると、井上円了は「真実」と「虚偽」を本位として、妖怪を分類したと思われる。人間の世界ではなく別の世界、いわゆる、異界において実際に存在している妖怪と人間が勘違いしたせいで人間の世界において存在している妖怪ははっきり区別されているらしい。その二つの種類が示す人間の気持ちも違うだろう。そういう違いを明らかにするため、性質によって妖怪を区別しながら、例を挙げるとともに、その妖怪は“本物”なのか“偽物”なのか、結論を出したいと考えている。

2. 2 性質による分類方法とその妖怪たちの誕生の意味

何かがあると証明したいとき、一般的にはどうすればいいのだろう。妖怪の存在を信じる人はどうやってそれを証明していたのだろう。一番簡単な方法は「自分の目を見た」か「誰かが目撃した」と公言することではないかと思われる。しかし、姿がみえない妖怪と姿がある妖怪についてそんな簡単に結論を出せるわけではない。どちらの物語のほうが説得力があるか検討してみよう。

○ 怪音 「音」の妖怪

一般的に、形態不明。感覚で感じられたり、音などがするが、目で形が見えない妖怪。

a) べとべとさん

「べとべとさん」という妖怪がいる。奈良県宇陀郡の暗い夜道と静岡県の小山を降りるときに遭えるという。夜道を歩いていると、誰かが後ろからついてくるような気がしたが、やっぱり誰もいない、その場合は「べとべとさん」がつけてくると言われる。こういう妖怪が人間に危害などを与えるとは思えないが、確かに怖がらせるのだろう。何も見えないのに、足音が聞こえることはとても不思議で、不安を感じるはずである。そのままで放っておいたら、説明しようとしなかったら、知識が足りない状態になる。だから、昔の人はその異常な現象に名をつけ、扱い方も考えた。足音を不気味に感じるときには道の片側に寄って、「お先にお越し」や「お先にどうぞ」と言ったら、ついてくる足音がしなくなるという。

べとべとさんに関してはこういう話もある。ある人が提灯を下げて歩いていると、ピタピタ足音がする。そこで、

「べとべとさん、先へ起こし」というと、

「先に行くと、暗くて歩けない」という。

「それなら、提灯を貸してやる」というと、べとべとさんは提灯を借りて先に行った。提灯は翌朝きちんと返されていたということである。

この話は「人は闇の中で、知識不足状態による恐怖を克服するために妖怪の物語を作ってきた」という論点を証明できる証拠の一つになるだろう。



図1：伝説ではべとべとさんは音だけで、姿が見えない存在だったが、その姿は水木しげるの想像によって図化されており、水木の漫画『ゲゲゲの鬼太郎』にも登場する。丸い頭部に足が生えた格好で、微笑んだような愛嬌のある口が大きく開いているべとべとさん。

図2：水木しげるの地元である鳥取県境港市の駅。本名はおおしのづ駅だがよくべとべとさん駅と呼ばれる。



b) 小豆洗い

b-1. 名前と場所

夜の谷川のほとりとか橋の下で小豆をとぐような音をたてている妖怪である。山梨県笛吹市境川、藤埜の滝付近、新潟県は糸魚川、秋田県、群馬県、京都府、東京都、愛媛県など、出没地域は全国多数である。日本全国で知られる妖怪だけあって別称も多岐にわたり、広島県世羅郡、山口県美祢郡（現・美祢市）、宇部市、愛媛県広見町（現・鬼北町）などでは小豆とぎ、岩手県雫石村（現・雫石町）では小豆アゲ、長野県長野市川中島では小豆ごしゃごしゃ、山梨県北巨摩郡では小豆そぎ、鳥取県因幡地方では小豆こし、岡山県都窪郡や阿哲郡（現・新見市）では小豆さらさら、香川県坂出地方では小豆ヤロなどと呼ばれる。前述の愛媛県広見町では砂洗いとも呼ばれる。

姿が見えず音だけはよく聞こえるが、小さな老人とも老婆の姿とも言われる。一般的に、害を与えないが、正体を突き止めようとすると、からかわれて川に落とされることもある。地方によっては「小豆とごうか人にとって喰おうか」などと人を脅かす「小豆洗い」もいる。埼玉では実際に人をさらうらしい。

b-2. 由来を知らせる物語

江戸時代の奇談集『絵本百物語』によれば、新潟県の法華宗の寺にいた日顕（にちげん）という小僧は、体に障害を持っていたものの、物の数を数えるのが得意で、小豆の数を一合でも一升でも間違いなく言い当てた。寺の和尚は小僧を可愛がり、いずれ住職を継がせようと考えていたが、それを妬んだ円海（えんかい）という悪僧がこの小僧を井戸に投げ込んで殺した。以来、小僧の霊が夜な夜な雨戸に小豆を投げつけ、夕暮れ時には近くの川で小豆を洗って数を数えるようになった。

他には、小豆に小石が混ざっていたせいで姑に叱られた女は川に身を投げて、それからその川で小豆をとぐ音が聞こえるようになったという話とか、川の洗い場で 50 歳ほどの女性が小豆と米を洗っていたため、そこには誰も洗濯に寄らず、その女はやがて死に去ったという話などもあるらしい。

一方、古来より小豆はその赤い色から魔よけや、けがれを払う霊力があると信じられ、ハレ¹⁾の日には赤飯を食べる風習がある。東北地方にはこんないい話がある。貧乏な百姓の嫁取りの時に、何もごちそうができないのを見かねて小豆洗いが赤飯を山のように置いていったそうだ。これらの話をみたら、小豆洗いという妖怪は害を与える場合もあるが、完全に悪の妖怪でもないかもしれない。

¹⁾「ハレとケ」とは、柳田國男によって見出された、時間論をとまなう日本人の伝統的な世界観のひとつ。民俗学や文化人類学において「ハレとケ」という場合、ハレ（晴れ、霽れ）は儀礼や祭、年中行事などの「非日常」、ケ（褻）はふだんの生活である「日常」を表している。

b-3. 「小豆洗い」の正体

「小豆をとぐような音」の正体については、さまざまな推論がある。小動物やイタチは尻尾で音を立てると言われる。水木しげるによると、夜の沈黙に混じっている小川のせせらぎが「ショキシヨキ」と小豆を投げるか洗うかのような音を立てても別に不思議ではない気がするそうである。他に、岡山県と長野県の「小豆洗い」の正体はキツネだと言われ、京都では狸の仕業か風で竹の葉が擦りあう音が正体とされる。また、広島県ではカワウソが正体と言われる。さらに、夜、変な音が聞こえ、気になって川のほうへいくと、目がよく見えず川に落ちることもかなり普通のことだろう。つまり、「べとべとさん」と違って、「小豆洗い」という妖怪は全く説明できない現象ではないとわかってきた。井上円了の分類に従えば、「小豆洗い」は偶然的な出来事に対して人が誤ったせいで認められた妖怪、いわゆる、誤怪だと考えられる。一方、「べとべとさん」が起こす現象は人間の心理から生まれる可能性もあるので、「仮怪」の「心怪」（心理的）であるかもしれないが、真怪である可能性もあると考えられる。



図3：『絵本百物語』より「小豆洗い」



図4：『ゲゲゲの鬼太郎』より「小豆洗い」

○ 獣 — 動物から誕生した妖怪

姿が現せる妖怪である。人間の目で見えるといわれるが、本当に目撃した人がいるかどうかは証明できない。

a) 山地乳

「小豆洗い」と同じ『絵本百物語』に描かれた妖怪である。コウモリは年をとったものが野衾（のぶすま）になり、さらに年をとると、怪異の形になった山に隠れ住むので、山地乳の名がある。深山の一軒家に宿を取ると、眠っている人間の寝息を吸い取り、その様子を他の誰かに見られていれば、寝息を吸われた者の寿命が延びるが、誰にも見られていなければ、その者は翌日に死んでしまうという話が伝えられている。これは証拠が全くない話だろう。もし目撃者がいても、寝息を吸われた人は本当に長寿になるのかわからず、目撃者がいない場合であれば、そういうことが起こったかどうか確認できない。しかし、地方によって、その山地乳をひどく恐れる人もいるらしい。

また、別の視点から考えよう。そのような証拠がない話を作った理由は何だろうか。

「怪談」の特徴の一つは「危険感」を持つことであろう。ひどい目に遭ったり死んだりしてしまう可能性があるという内容を含む物語がとても多い。しかし、「絶対に死ぬ」と述べた話はあまりなかった。例えば、前の「小豆洗い」に対して、突き止めようとしなかったら、川に落とされないかもしれない。また、深山に泊まらなければならないとき、「山地乳」が現れても、誰かと一緒にいたら、死なないかもしれない。つまり、危険を避け、自分を救う方法があるだろう。このように分析すれば、「妖怪」の物語は人を怖がらせる



図5：『絵本百物語』より「山地乳」

話だけではなく、警告になるものでもある。「小豆洗い」の場合、「夜に変な音がしても、川に近づくな」と述べ、「山地乳」の話が「深山に一人で泊まってはいけない」ことを示しているのかもしれない。昔の人が本当にそう言いたくて「妖怪」の物語を作ったかどうかわたしには確かめる手段がないが、不合理な推論でもないと考えている。

さらに、「寿命が延びる」という内容もおもしろいと思う。一般の人なら、誰でも長く生きたいものである。山地乳に寝息を吸われるために、わざと深山に入り山地乳が現れるのを待つ人がいたらしい。確かにこういう話なら、迷信になりやすいだろう。

b) 妖狐

中国や中国文化の影響を少なからず受けた日本と韓国の文化では、「狐」は妖力が強い生き物だと言われる。「山地乳」のように、年をとると、妖怪になるという話がある。しかし、日本で、きつねは人を化かすいたずら好きの妖怪だと認めることもあり、稲荷神の神使、または、稲荷神自身としている信仰もある。

b-1. 怪異として

b-1-1. 狐の祟り

今から百年近く前、治郎兵衛という農民が山の中で死んだ雉を見つけ、これを拾って帰った。その日の夕刻から大雪が降っていたが、夜半になると、その雪の中で一匹の狐が悲しそうにギャンギャンと叫びながら、治郎兵衛の家のまわりをまわりはじめた。治郎兵衛は狐が雉を返して欲しいのだろうと思い、明け方に起きると、

「そんなに惜しくば返してやる」と、戸を開け、雉を投げつけようとした。しかし、狐はもう家の前で死んでいた。

それから間もなく治郎兵衛の家には不幸が相次ぎ、結局一家離散となってしまった。あれは治郎兵衛に雉を返してもらえない狐の祟りだといわれた。水木しげるは「食べ物の怨みとは恐ろしいものだ」とコメントした。

この物語はベトナムのおとぎ話と似ているところがある。

→ 一般人である主人公がいる。

→ 読み終わると、ある教訓が学べる。（この話の場合は「他人の物を勝手に奪ったら、きつと祟られる」という教訓が示されていると思われる）

「狐の祟り」は井上円了によれば、仮怪の心怪であろう。狐自身は妖怪ではなく、その狐の怨みは呪いになって人間に害を及ぼすものである。この妖怪は闇に抱かれる異界ではなく、人間が存在している日常世界で生まれ、人の罪、または、過ちから誕生した。このような物語は「べとべとさん」の物語とは違う。不安を克服するために作られた話ではなく、本当の恐怖を起こす話であろう。人を怖がらせて、罰を受けたり不幸になったりしたくないなら、悪いことは絶対にすると伝えるのも「妖怪」が誕生した理由の一つであるとわかってきた。

b-1-2. 狐憑き

狐信仰の変種であり、日本独自の現象として、「狐憑き」が存在する。人がさまざまなおかしいことを口走ったり行動したりすることを示す。その異常な現象は平安時代ごろから述べられている。普通の狐と違って姿は見え、いきなり人に取り憑き、その人の心を占領するという話である。行者や神職などが、「松葉いぶし」や、キツネの恐れる犬に全身をなめさせるといった方法で、キツネを落とす呪術を行っていたらしい。

現代の科学的な視点からみると、「狐憑き」という現象は説明することができる。精神薄弱者や暗示にかかりやすい女性たちの間に多く見られる発作性、ヒステリー性精神病と説明されたい。精神医学において、ヒステリーは解離性障害ともいい、心的外傷への自己防衛として、自己同一性を失う神経症の一種で、自分が誰か理解不能になったり、複数の自己を持ったりする病気であるが、一般的に、その「ヒステリー」という言葉は単に短気であることや、興奮・激情により感情が易変し、コントロールができなくなる様子のことをさすことが多い。

しかし、昔の人はヒステリーはもちろん、精神疾病さえもわからなかったに違いない。人の自分らしくなく、わけがわからない行動の原因はその人自身の心に病気があると考えられず、外から何かに憑かれたと信じたのであろう。キツネだけではなく、狸、蛇、犬神も人間の心を占領する「犯罪者」とされたという。こういう話は歴史上多く見られる。ヒステリーのような精神疾病だけではなく、あの頃の人々の知識を超えた原因不明の病気は何か超自然的な存在がもたらした異常な現象だと考えられ、普通の病気とは認められなかった。だから、ヨーロッパの魔女や日本人に憑くキツネなどの非人間的なものは人間を狂わせる罪を負うことになった。

前の「狐の祟り」と「狐憑き」は動物の狐に基づいて想像された。だが、獣として存在しているわけではなく、異常な現象を起こす目で見えないという存在である。人の不幸、または理解できない肉体的な状態も精神的な状態もその怪しく超自然的な“悪役”のせいだとする。そういう怪異は祟りとして、呪いとして、または憑き物として人間の思想に存在している。この物語は「狐憑き」のように迷信になる場合もあり、「狐の祟り」のように教訓になる場合もある。結局、人間は妖怪が避けられず、生活の前面で妖怪の登場が必要だろう。

b-1-3. 九尾の狐

狐の妖怪の中で一番有名なものは九尾の狐である。もともと中国神話の生物である。9本の尻尾を持つ妖狐。九尾の妖狐、九尾狐（きゅうびこ）、単純に九尾、または複数の尾をもつ狐の総称として尾裂狐（オサキ）とも呼ばれる。



九尾狐

大昔、世界が混沌として泥海のようにになっていた時代に、そこから立ちのぼる陰気が籠もって妖狐になった。それが年を経て不死身になり、全身が金毛に覆われ、長い尾が九つに裂けた。中国の各王朝の史書では、九尾の狐はしばしば瑞獣としてその姿を見せる。

九尾の狐が、中国の殷（いん）という古い国へ行って、妲己（だっき）と名乗る絶世の美女に化けて王をだまし、残虐のかぎりをつくした。周の武王が立ち上がってその国を滅ぼすと今度はインドに現れ、華陽夫人となって国の政治を誤らせた。その後、日本から遣唐使として中国に渡っていた吉備真備の船に少女に化けて乗り込み、日本にやってくると今度は捨て子に化けて武士に拾われ、頭がよく美人だったので、18歳で宮中に仕え、のちに鳥羽上皇に仕える女官となって玉藻前（たまものまえ）と名乗る。その美貌と博識から次第に鳥羽上皇に寵愛され、契りを結ぶこととなった。しかし陰陽師・安倍泰成が玉藻前の仕業と見抜く。安倍が真言

を唱えた事で玉藻前は変身を解かれ、白面金毛九尾の狐の姿で宮中を脱走し、行方をくらしました。

「九尾の狐」はこれまでに紹介した妖怪と違って、日本だけに存在する妖怪ではなく、世界的な妖怪だと言える。九尾の狐に関する各国の話には類似点が数多く見られる。美女に化けることができ、国の王を悩殺して、その国を支配するか、滅ぼそうとするか、あるいは、多くの惨酷なことをする。それに、この物語は地理も時間も詳しい、つまり、歴史がある物語だと考えられる。歴史上の出来事において超自然的な人物が登場するのは多くの文化にみられることである。人間自身が悪いと認めるより非人間的な存在に「悪の元」の役割を果たさせるほうが快いだろう。また、ファンタジー要素を話に加えたら、語るのももっと楽しくなり、話自体の魅力も増してくる。

中国の話と日本の話の違いについて分析してみよう。妲己は紂王を墮落させて、妲己のことなら、紂王は何でも聞いたという。鬼神をあなどり、沙丘に大勢の者を集めて楽しみ戯れた。酒をそそいで池とし、肉を掛けて林とし（酒池肉林）、男女を裸にして互いに追いかけさせ、長い夜に酒を飲み続けた。最後に殷を滅ぼし、周によって攻められた際に武王により殺されたとされる。一方、日本の玉藻前は鳥羽上皇の病気を拵え、陰陽師によって宮廷から追われた。中国の話は殷の破滅と緊密に繋がっていて、想像上の生物である「九尾の狐」を利用し、紂王の罪を少しでも軽くするために作られたのかもしれないが、日本人はその物語に基づき、似た物語を作ったが、天皇が病気になるより他に被害はない。玉藻前の不行状や、残虐な行動についての記録もあまりなさそうである。

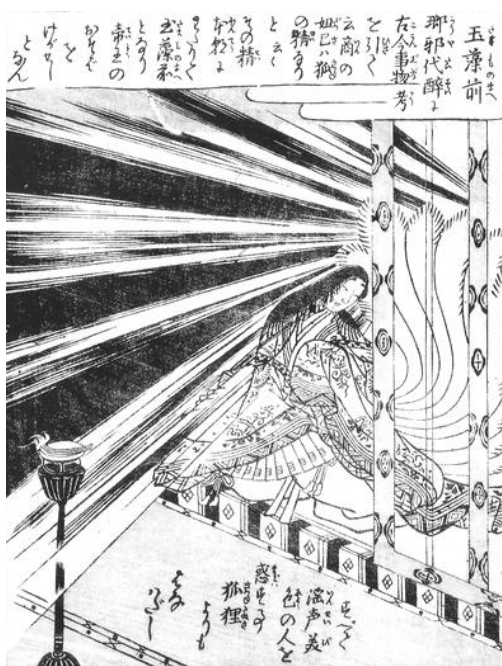


図7：『今昔画図続百鬼』より「玉藻前」



図6：『日本妖怪大全』より「九尾の狐」

b-2. 神として

稲荷神は日本における神の一つ。稲荷と狐はしばしば同一視されており、例えば『百家説林』に「稲荷といふも狐なり 狐といふも稲荷なり」という女童の歌が記されている。稲荷神はお稲荷様・お稲荷さんとも言い、貴狐天皇（ダキニ天）、ミケツ（三狐・御食津）、野狐、狐、飯綱とも呼ばれる。稲荷神を祀る神社は**稲荷神社**と呼ばれる。朱い鳥居と、神使の白い狐がシンボルとなっている神社として、広く知られている。中世以降、工業・商業が盛んになると、稲荷神は農業神から工業神・商業神・屋敷神など福德開運の万能の神とみなされるようになり、勧請の方法が容易な申請方式となったため、農村だけでなく町家や武家にも盛んに勧請されるようになった。稲荷神社の前には、狛犬の代わりに、宝玉をくわえた狐の像が置かれることが多い。それは小松和彦の「妖怪は祀られていない神」、祀られたら、神だと認められるという論点を証明する例の一つであろう。狐を礼拝するのは日本文化の特色だと思われる。その信仰からみると、日本人が自然に合わせるライフスタイルもよく感じられる。

○ 人間に姿が似ている妖怪

妖怪は人間の感情から生まれた、それは、多くの場合消極的な感情である：嫉妬、遺恨、未練、悲哀．．．。そういう妖怪について検討してみよう。

a) 高女

嫉妬深く、男に相手にされない醜女がこの妖怪になるという。画図では、女郎屋らしき建物のそばで女性が下半身を長く伸ばした姿が描かれている。普段は普通の女性だが、ひとたび怒れば正体を現し、下半身を伸ばし2メートル以上にもなり、遊女屋などの2階を覗いて歩くらしい。人には突然「誰かが見ている」と感じられる現象で、特に何か悪いことをしているときに現れる。その感覚を解釈しようとして、「高女」の話を作った。「べとべとさん」の話のような夜に山道を一人で歩くとき誰かが後ろからついてくる感覚と高い建物にいるとき窓のそこから誰かに見られている感覚はおそらく緊張感による幻覚だろう。そして、物語とともに、社会的なメッセージもついている。女の嫉妬は恐ろしいものだ。



図8：鳥山石燕『画図百鬼夜行』より「高女」

b) 濡女子

長崎県の対馬では、雨が降る夜などに濡れそぼった女の妖怪が出る。また、四国、九州地方の旅人は、海沿いや川に行くと迷子のずぶ濡れになった若い女性と出会うと伝えられ

ている。女は人に笑いかけてくるが、うっかり笑い返してしまうと、大変なことになる。彼女は永遠にそのやさしい人間の後をついて回るのだとされ、どこへ行こうとも常に濡れ滴って臭い沼の臭いが一生体から離れないのだと言う。濡女子から逃れるように彼女を無視して笑顔を拒絶する他に方法はないが、普通の人間とあまり変わらない姿で現れるため、手遅れになる場合が多い。実は、濡女子は家族が溺れ死んだ後に残された者による強い喪失・悲哀の感情によって作られると言われる。人に害を与えても悪意から生じた行動ではなく、人々から関心を引きたいという切望なのかもしれない。こういう物語は「妖怪と日本人の心は緊密に繋がっている」という論点に対するいい証拠になるだろう。「高女」と「濡女子」は直接的に人間の消極的な感情を代表している。さらに、人間の感情とは強い



もので、激しくなると、妖怪を形成し、他人に迷惑をかける場合もあると気づいてきた。

「濡女子」には井上円了の分類方法による「実怪」の特徴がはっきりみえる。人間のようにみられ、人間と触れ合うことまでできる。人を怖がらせるために人の前に現れる妖怪ではない。誕生の話を知ってから、「濡女子」に対し、どんな感情を持つべきなのか、簡単に答えが出せなくなった。

図9：『日本妖怪大全』より「濡女」

III. 時代と妖怪

では、日本の歴史をみてみよう。1世紀初頭、中国の書物の中で「人知を超えた奇怪な現象」という意味で、妖怪という言葉が使われている。

1. 平安時代 — 室町時代 — 「百鬼夜行」

恐ろしげで奇々怪々な風情の妖怪たちが、いずこからともなくぞろぞろと現れて行列をなし、闇の京都を徘徊している。この怪異現象を平安時代には「百鬼夜行」と呼んだ。

1.1. 京都—文化の中心地、妖怪の京

全国にはどこにも妖怪がいる。同じ特徴を持っている妖怪が地域によって、形と名前が異なる場合は珍しくない。では、京都は他の地域と何が違うのだろうか。それは「百鬼夜行」という存在である。概念とともに、「百鬼夜行」の詳しいイメージを求めるため、平安時代から室町時代にかけて最初の百鬼夜行絵巻が描かれ、人間は妖怪と鬼の姿がやっと見ることができた。

「百鬼夜行」とは、多くの異形の鬼と妖怪たちが夜中に徒党を組んで行進する現象を言う。主に平安時代の京都で起こったとされるもので、この怪異が起りやすい「夜行日」なるものがあるとも考えられていた。

読経することにより難を逃れた話や、読経しているうちに朝日が昇ったところで鬼たちが逃げたり、いなくなったりする話が一般的で、仏の功德を説く話である。当時の貴族たちはこの妖怪の群れに出会わないために陰陽師に相談し、夜行日の夜には外出するのを避けたり、やむを得ず外出する際は魔除けの護符を持ち歩いたそうである。つまり、他の地方の妖怪たちより、京の妖怪の群れ、いわゆる「百鬼夜行」のほうが宗教（仏教）、陰陽道、平安時代の貴族階級との緊密な関係を持っていると言える。



図 10：『百鬼夜行絵巻』土佐光信

1.2. 室町時代に書かれた絵巻における「百鬼夜行」

妖怪の大半がいわゆる「付喪神」と称する古道具の妖怪で占められている。この系統絵巻の登場以降、「百鬼夜行」とは道具の妖怪たちの行列、つまり「百器夜行」とイメージされる傾向が強くなった。

2. 江戸時代 — 第一次妖怪ブーム

正徳 6 年（1716 年） - 『世説故事苑』の中に「妖怪」と「白澤図」の解説がある。妖怪の解説には「吾が俗の言い伝える怪事（俗に怪事を誤ってケチと言う）」の類が多い。この時代の印刷・出版技術の発展とともに、出版文化が発達して、書籍の豊富な時代だと言え、妖怪に関する作品、画集もたくさん作られた。妖怪画集というと、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』と佐脇嵩之の『百怪図巻』で、奇談集というと、『絵本百物語』は見過ごしてはいけない三つの作品である。以前と違って、たくさん妖怪と鬼と一緒に載せている絵巻ではなく、妖怪の 1 点 1 点に名称を添えて紹介している。『画図百鬼夜行』は鳥山石燕が描いた『百鬼夜行シリーズ』と呼ばれる四つの妖怪画集の中で、最初に刊行されたものである。『百怪図巻』には全 30 点の妖怪画が収録されているが、筆致はどれも丁寧で、古典の妖怪画の中でも質の高い作品といわれる。ぬらりひょん、うぶめ、雪女などのとても有名な妖怪が載せてある。また、名前のように、『絵本百物語』は江戸時代に流行した百物語怪談を集めて記載し、妖怪の挿絵をつけている本である。第一巻から第五巻までで、40 点以上の妖怪が紹介され、「小豆洗い」や「山地乳」も含められる。結論としては、妖怪信仰は平安時代より江戸時代にかけて民衆の中でかなり広がっていたと思われる。

日本の最初の“妖怪ブーム”は江戸時代に起こったと言われ、1776年発行の『画图百鬼夜行』が火付けになったらしい。妖怪を楽しむことが粋になり、妖怪物品（かるた、花火など）も盛んになったそうである。つまり、江戸時代の日本人は妖怪を恐れるべき対象というより、“娯楽”のように考えるようになってきた。

3. 現在

3.1. 新しい妖怪

妖怪は昔の人によって作られた産物というだけではなく、現代においても新しい妖怪がいくつも現れているという。例を挙げると、「口裂け女」はとても有名な現代の妖怪の一つである。この妖怪は1979年の春から夏にかけて日本で流布され、社会問題にまで発展した都市伝説から誕生した。

顔の下半分を覆う、大きなマスクをしている女性の妖怪で、学校から帰宅途中の子供などに声をかけてくる。

……「アタシ、キレイ？」と。

大きなマスクで顔がよく見えず、問われた子供はとまどうだろう。

でも、質問に答えようとする。

「……キレイです」

そうお世辞で言ったが最後。その女はおもむろにマスクを引き剥がし……その耳まで裂けた大きな口をあらわにし……そして叫ぶのだ。「これでもキレイかー！？」と。

……また、「キレイじゃない」と答えれば、手に持ったカマやナイフで引き裂かれて、殺される。

という話がある。

噂として急速に広がって、小学生の子達を怖がらせて、皆が学校に行きたくなくなったらしい。これは日本列島を席捲した妖怪であり、いろいろな推論が出されている。小学生三年生とか四年生とかいつも母親を感じている子供たちの心意の投影という説もある。いつも母親に勉強しろ勉強しろとせめたてられて、そのイメージが口裂け女の姿をとった、般若面で口が裂けた恐ろしい形相の女の姿になったと言う。

3.2. 現在の妖怪ブーム

今もなお日本人は妖怪の存在を信じているのだろうか。文明社会には超自然的なものの居場所はもうないのだろうか。しかし、現代人たちは妖怪の存在を信じて、信じなくても、妖怪を楽しむことをやめないように見える。伝統的な妖怪たち、または、昔の物語と伝説に基づき、新しい作品はつぎつぎに造られている。年齢に関わらず大人気の水木しげるの漫画「ゲゲゲの鬼太郎」は最も説得力がある例だと思われる。漫画作品は貸本を経て

1965 年から 1997 年の間に多くのシリーズが描かれ、幼年誌から青年誌まで幅広く掲載された。初期の作品は怪奇色が強かったが、鬼太郎と妖怪の対決を主とした内容へ変化した。妖怪ブームを巻き起こしたテレビアニメは、日本のテレビアニメ史上最多となるシリーズ 5 作、4 回のリバイバルを果たす。水木しげるが描いていたキャラクターは古い絵における妖怪のイメージとあまり変わらない。

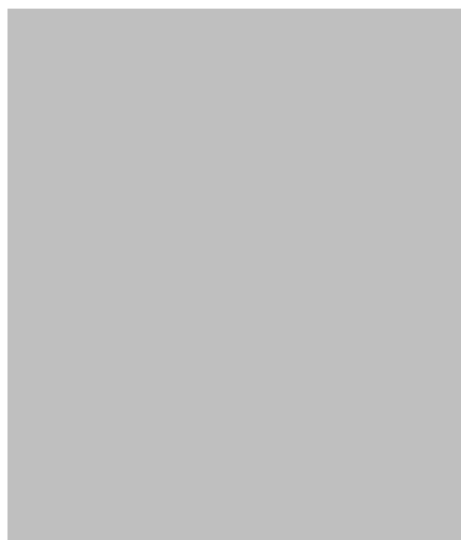
有名な作者、または、妖怪研究者の一人は京極夏彦である。一番人気がある作品は「百鬼夜行シリーズ」という連続小説である。第二次世界大戦後まもない東京を舞台とした推理小説である。作中に実体として登場はしないが、個々の作品のタイトルには必ず妖怪の名が冠せられており、その妖怪に関連して起こる様々な奇怪な事件を「京極堂」と中禅寺秋彦が「憑き物落とし」として解決する様を描く。

また、初めの部分に書いた「ぬらりひよんのまご」も最近人気になっている妖怪に関する漫画シリーズである。『週刊少年ジャンプ』（集英社）で 2008 年 15 号から 2012 年 30 号まで連載された。妖怪の総大将・ぬらりひよんの血を継ぐ少年を主人公とする怪奇ファンタジーである。現代の日本を舞台に、百鬼夜行が激突する任侠妖怪の世界を描いた物語となっている。伝統的な妖怪もたくさん登場するが、少なくともその性質は変わってきている。少年向けの漫画なので、正義感があり、愛想のいい妖怪であるキャラクターが何人もいる。以下の絵のように、昔のイメージと比較すれば、かなり異なるのがはっきり分かる。



九尾の狐

ぬ
ら
り
ひ
よ
ん



まとめ

恐怖は人間の普通の感情であり、「妖怪」、「神」、「化け物」の誕生の基礎である。「妖怪」は日本文化の一つで、種類によって、日本人の考え方のいろいろな面を表している。迷信として、信仰として、日本の長い歴史の中に存在してきたが、現在本当に信じている人は少ない。しかし、文化としての妖怪は消えていないのである。

本研究では、妖怪はどんなものなのか、それぞれの物語が何を意図しているのかを分析することによって、日本人の心が少しわかってきたような気がする。今後は妖怪と幽霊、神の違いや昔の妖怪と現代の妖怪の違いをさらに詳しく研究しようと思っている。

参考文献

- (1) 小松 和彦、常光 徹、小村 健二 【他】 (2009) 『百鬼夜行の世界』 角川学芸出版
- (2) 田中 貴子、澁澤 龍彦、小松 和彦、花田 清輝 (2007) 『図説 百鬼夜行絵巻をよむ』 河出書房新社
- (3) 水木 しげる (2014) 『決定版日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様』 講談社
- (4) 宮田 登 (1985) 『妖怪の民俗学 日本の見えない空間』 旅とトポスの精神史
- (5) William E. Lyons (1985) 『Emotion』 Cambridge University Press
- (6) <http://ja.wikipedia.org/wiki>
- (7) <http://www.kyotohyakki.com/index.html>
- (8) <http://matthewmeyer.net/ja/>